様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月２４日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０３６０
研究課題名（和文）　音韻と文法のインターフェースからの中国語の類型的特徴の再検討

研究課題名（英文）　New perspective on Chinese typological features based on syntax-phonology interface

研究代表者
太田　斎（OTA　ITSUKU）
神戸市外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：４０１６０４９４

研究成果の概要（和文）：
中国語（漢族の固有語である漢語を指す）は類型的に孤立語の典型と見なされ、形態変化など、非孤立語的な特徴にはほとんど注意が払われてこなかった。本研究では文献及び申請者自らが現地調査で収集した現代諸方言のデータを基に、名詞及び動詞に関わる変韻現象を対象に、その形成のメカニズムと機能を分析し、中国語においても音節の弱化、融合によって他の異なる類型の言語同様に、高度の文法化、形態化が生じていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
Chinese (the term designs here the Sinitic languages spoken by the Han people) is typologically characterized as a typical isolating language. Consequently, phenomena such as morphologization, which characterize languages that are not isolating, have remained largely understudied. This project deals with morpho-phonological changes such as rime change in verbs and nouns, analyzes their linguistic functions and the various mechanisms that led to their development. Our analysis is based both on the systematic survey of second-hand data and on first-hand data gathered during our own field-work. We argue that there are in some Chinese dialects phenomena such as phonetic weakening and syllable coalescence, which reflect a high degree of morphologization and grammaticalization, in a way which is quite similar to non-analytic languages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　言語学・言語学
キーワード：文法化、語彙化

１．研究開始当初の背景

中国語は、類型論的な観点から見ると孤立語に分類される。そして、「実詞」が一定の文法化を遂げて「虚詞」となることはあっても、文法化の更なる段階であるとされる接辞化(affixation)、形態化(morphologization)の段階に至ることはないという認識もまた、研究者の間で広く共有されている。他の言語でよく観察される文法化を伴う音声弱化・音声変化・形態化現象が殆ど見当たらないのも、この類型的制約の具体的な現れであると言われる。しかし申請者は長年のフィールドワークを通じて、このような見方は決して中国語の現実を正確に反映してはいないという認識に至った。そこで現代諸方言のデータを収集して、文法化、語彙化について検討を加えようということになった。

２．研究の目的

中国語の類型的特徴の見直しを行い、中国語研究に新たな展望を見出し、一般言語学的アプローチにより、類型変化に関わる現象を分析する。本研究で主たる対象とするのは

① 動詞の文法範疇、及び

② 名詞の文法範疇

である。①に関しては動詞音節に後続するアスペクト・マーカーの音声的弱化、動詞語幹音節との融合といった形態的特徴、音節が融合するか否かで機能的にどのような変化が生じるか、②については名詞接尾辞音節の弱化、名詞語幹音節との融合といった形態的特徴、他の代表的名詞接尾辞、との機能分担の状況、を調査し、前節の「１．研究開始当初の背景」に記した従来の中国語に対する固定観念に修正を迫る。

３．研究の方法

文献に報告されている事象の収集とフィールドワークによるデータの収集から着手し、それらを整理し、分析を進めた。

前節①で対象としたのは完了アスペクトを表わす「了」や「上」、「下」などの動詞接尾辞及びそれと先行する動詞語幹音節が融合した形式であり、②で対象としたのは、いわゆる「Ｚ変」、「子変」と呼ばれる普通話の代表的名詞接尾辞「子」に相当する接尾辞及びそれと先行名詞語幹との融合形式、そして小地名として存在する、「(姓)」＋「家」＋「庄/村/郷/etc.」といった語構成の地名である。「(姓)」は現地で耳にすることのできる姓名である。河南、河北では「(姓)」＋「家」の部分が融合して一音節になっている場合が多く、その形態的特徴は①の動詞の融合形式とよく似ている(それ故、両者を纏めて「Ｄ変」と称する研究者もいる)。このため小地名に見られる音節の融合は動詞に見られる融合形式に関わった動詞接尾辞は単独で存在しない場合もあるのだが、その元の姿を判断する上で、ヒントとなる。②についてはこの他、数量詞(「数詞」＋「個」)の融合形式や「今日」、「昨日」、「先日」、「幾日」といった「～日」という語構成の時間詞の融合形式も調査対象とした。太田はまたそれ以外の体系的ではない、個別の音節融合の例及び特殊な音声変化のデータを集め、融合のプロセスも研究した。

調査、分析の作業の進め方は具体的には、各年度ごと、以下のようであった。

2007 年度は文献データについては、方言専志などの方言調査報告と地方志所録方言志などから、対象とする現象の事例を収集した。また山西省太原で開催された第三回晋方言国際研討会に太田、ラマールともに参加、下記「５．主な発表論文」の〔学会発表〕に記した口頭発表を行ない、太田は特殊な語形変化の例を紹介、分析を加えた。そこで学術交流を進めると同時に、現地の研究者から本研究の対象とする事例に関する情報収集を行い、また今後のフィールドワークの地点について相談した。学会終了後、二人で山西省嵐県に赴き現地で動詞のアスペクト表現に関する調査を行った。また 2008 年 3 月には陝西師範大学の邢向東教授の尽力により、陝西省岐山において、太田、ラマール共同で現地調査により、動詞、名詞の変韻現象に関するデータ収集を行うことができた。

2008 年度は 6 月に太田、ラマールが二人で第三回西北方言与民俗国際学術研討会に参加、口頭発表すると同時に、出席していた現地の研究者との学術交流を通して山西、河南のデータを収集した。特に呂枕甲教授（臨汾師範学院）からは山西省運城方言の、辛永芬准教授（河南大学）からは浚県方言の詳細なデータの提供を受けた。また辛准教授には河南方言調査の計画の実現に向け、協力を要請した。辛准教授の尽力により、2009 年 3 月に開封において、二人で現地の研究者を交えて開封、長垣、済源の名詞、動詞の変韻現象の調査を行うことができた。

2009 年度、太田は丁声樹先生百年誕辰暨第五回官話方言国際学術研討会に出席、口頭発表を行い、現地の研究者と交流し、データの収集を行った。また 12 月には辛永芬准教授を日本に招聘し、神戸において共同研究を行い、また同月 24 日、大阪（同志社大学サテライトキャンパス）で研究発表会を開催、日本特に関西地区在住の漢語方言研究者と交流を図り、名詞（太田担当）、動詞（ラマール担当）の形態変化に関わる変韻現象について議論した。

４．研究成果

太田は2007年度の陝西省岐山県の調査で収集したデータを音声分析し、名詞に後続

する指小接尾辞の融合状況について、シンタグマ末位では現れにくく、このため動詞語幹のアスペクトを表す接尾辞との融合に比べ、調査で聞き出し難いことを翌2008年の6月29日の中国語学会関西例会の口頭発表において指摘した。

2007年度には８月に山西省太原で行われた第三回晋方言国際研討会で、特殊な音変化の事例として、「硯」と「閻王爺」の例を取り上げ分析を行った。その際に参加していた現地の研究者より、方言データの提供を受けた。この研究内容は刊行年が前後してしまったが、『第三回晋方言国際研討会論文集』と『神戸外大論叢』に発表した。

また身体名称に見られる特殊な音変化について、「睫毛」という語を例に、諸方言に見られる形式を分析し、常用名詞に現れる連音変化の類型について考察を行った。これについては2008年6月13-15日の蘭州の学会における口頭発表の後、参加者と意見の交換を行い、修正を加え、『神戸外大論叢』に論文として発表した。

太田のこれまでの調査により、以下のことが明らかになった。開封方言では、いわゆる「子変」を形成する名詞接尾辞は、語幹音節が-n 韻尾の場合のみ、融合せず、恐らくこの鼻音韻尾の順行同化を受けて、nou という自立形式となっている。

商丘方言には「子変」は存在しないが、普通話の「子」尾に相当する名詞接尾辞は、語幹音節が鼻音韻尾か否かで、nən(~lən)~tei といった変異体がある。このことから、開封方言の「子変」を形成する名詞接尾辞は、単独では存在しないが、tou（或いはlou）のような変異体であると考えられる。開封方言においては、語幹音節の韻母の形式如何により、融合する場合と融合しない場合に分かれる。融合するか否かを分ける音声的条件は一致しないが、これは山東の博山、新泰、章丘、平邑などの方言における名詞の変韻現象が一部の韻母に限られること、また北京周辺の定州、安国、博野、固安などの方言で「児」尾が一部の韻母に限り融合して「児化」を形成していることと軌を一にしている。ただ大変遺憾であるが、この *tou (或いはlou) が「児」に由来するものかどうかについては、明らかにすることはできなかった。このことは2009年度の科研報告書において指摘したが、論文として公表するには至っていない。なお太田は1984年の「山東方言における‘児化’」（東京都立大学人文学報166号）という論文において「Ｚ変」は「児化」の方言的変異体であるとする仮説を提示したが、その後も未解決の問題があり、初歩的な段階に留まったまま研究の進展はなかった。最近では「Ｚ変」は「児化」であると主張する中国人研究者も現われた。この研究者とは2009年の学会の折に直接議論する機会があったが、彼も全てを説明し尽くしている訳ではない。例えば山西運城方言の「Ｚ変」を形成する形態素は明らかに tou であり、lou ではない。これを「児」の字音とするには無理がある。“-子児”という接尾辞を設定する説も成功してはいない。「Ｚ変」を形成する名詞接尾辞の形態とその先行語幹音節との融合のプロセスについては、依然としていかなる研究者も万人を納得させる説は提示しておらず、なおも研究の余地は残されている。

地名の変韻現象では、「家」が弱化しつつ直前の姓を表す音節に呑み込まれる状況を分析し、姓を表す音節がいわゆる内転系の主母音(ə系統)の場合には、主母音が外転系(a系統)に入れ替わる、ablaut のようなことが起こることを解明し、これが一部方言のいわゆる「Ｚ変」や動詞の内部屈折と呼ばれる現象においても見られるということを2009年12月24日の研究会における「Ｚ変研究概況及其关键问题（Ｚ変研究状況とカギとなる問題)」というテーマの口頭発表の中で指摘した。

ラマールは2007年度に陝西省の岐山方言で行った調査のデータに基づいて、次の研究論文を書き上げた。

１)「西北方言における、習慣的行為を表示する文末助詞 ni について」(蘭州の口頭発表に手を加えて「咸陽師範学院学報」に発表)。

２)『文法化と文法研究　４』(呉福祥編）に掲載された、

「北方方言における着点マーカーの文法化と文法的位置の機能」（中国語）というタイトルの論文の、着点マーカーが動詞語幹と融合する類型の描写に上記データを盛り込んだ。

３）方向を表す「往里」「往回」などのような副詞の調査データを利用して、2008年9月27日シンガポール国立大学で口頭発表を行った。標準語にないような「往x」型の副詞がそろっており、x に方向補語と同じ形の形態素を当てる語彙化・文法化プロセスの動機付けを解明する研究である。

ラマールは，前年度の陝西省の調査データを利用して歴史文献研究を行い，2009年8月に上海師範大学で開催された第五届汉语语法化问题国际学术研讨会で口頭発表を行った。また同年12月に河南大学の辛教授との共同研究を進め，上記の12月24日の研究会で「動詞範疇に関わる音節融合とその文法機能」という研究発表を行った。その発表は先行研究をまとめて，最近の調査データも検討に加え，漢語方言における動詞の変韻現象の総合的分析を測るものるである。

ラマールはこの発表で，陝西・山西・河南・河北の複数の方言データに基づき，動詞変韻の文法機能について，「限界性」という概念を用いて，従来の研究では指摘されてきたば

らばらな諸機能に統一的な解釈を与えた。また中国語についてよく問題とされる文法標識の「義務的使用」を基準に，変韻現象が高度の形態化現象としてみなすことができることを主張した。その証拠の一つとして，動詞の可能形という派生形式のあり方を取りあげた。日本語の「屋根にあげる」にあたる中国語の〔動詞＋着点マーカー＋着点名詞〕という構文では，着点マーカーが動詞語幹と融合し本研究が対象とする「変韻」現象がよく観察される。こうした構文には，動詞語幹と着点マーカーの間に否定詞が挿入され，「屋根にあげることができない」という派生構文ができる。しかし動詞語幹と着点マーカーが融合する一部の方言においては，その派生構文でも着点マーカーが動詞語幹から分離することができず，本来の〔動詞＋否定詞＋着点マーカー＋着点名詞〕ではなく，それらの方言特有の〔動詞語幹と着点マーカーの融合音節＋否定詞＋着点名詞〕という破格的な可能形が観察されている。このような現象は従来の文法化・形態化の研究で取り上げられることはなかった。
なお、2009 年 12 月 24 日，同志社大学大阪サテライトキャンパスで行われた本研究の活動の一環であるこの研究会においては、招聘研究者の辛永芬准教授が「豫北方言語法音変」（河南北部方言の文法化を反映する音声変化）というテーマで、未発表の河南省北部方言（複数地点）の文法的機能を担う形態変化現象を紹介した。この研究会には中国語方言文法の研究者のみならず、山西方言の「Ｚ変」の研究者も参加し、上述の太田、ラマールの発表も交え、活発な議論が行われた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）
①太田　斎：北方方言“眼睫毛”的对应词的特殊音变化(2)，神戸外大論叢 60 巻 6 号，2009，pp.91-103
②太田　斎：北方方言“眼睫毛”的对应词的特殊音变化(2)，神戸外大論叢 60 巻 3 号，2009，pp. 63-76
③太田　斎：北方方言“眼睫毛”的对应词的特殊音变化(１)，神戸外大論叢 59 巻 4 号，2008，pp. 23-43
④太田　斎：北方方言里面所能见到的类音牵引等语音现象――以山西方言的“砚瓦”为例――(续),神戸外大論叢第 57 巻 3 号,2007，pp. 93-105
⑤ラマール・クリスティン（柯理思）：西北方言的慣常性行為標記“呢”，咸陽師範学学報(中国)24 号，2009，pp. 39-43
⑥ラマール・クリスティン(Tang, Zhengda と共同執筆)：A contrastive study of the linguistic encoding of motion events in Standard Chinese and in the Guanzhong dialect of Mandarin (Shaanxi)，中國語言學集刊（中国香港）Vol.2,no.1，2007，pp. 137-170
⑦ラマール・クリスティン（柯理思）：従趨向範疇的方言表述看“書面漢語中的不同層次”的判定,中国語学 254 号，2007，pp. 51-73

〔学会発表〕（計 9 件）
①太田　斎：常用词特殊音变的类型：“顺同化”及其他，丁声树先生百年诞辰暨第五届官话方言国际学术研讨会，2009.10.24-25，河南大学文学院(中国 开封)
②太田　斎：身体部位名称的特殊音变，第三届西北方言与民俗国际学术研讨会，2008.6.13-15，中国 兰州城市学院
③太田　斎：陝西省岐山方言のいわゆる「一部重ね型」語構成について，日本中国語学会関西支部例会，2008.6.29，大阪産業大学梅田サテライト
④太田　斎：北方方言里面所能见到的类音牵引现象――以山西方言的“砚瓦”为例――，第三届晋方言国际研讨会，2007.8.11，中国山西大学方言研究中心
⑤ラマール・クリスティン（柯理思）：18 世紀以来“往+謂詞(里)”式副詞性成分的発展，第 5 届漢語語法化問題国際学術研討会，2009.8.21，中国 上海师范大学
⑥ラマール・クリスティン（柯理思）：西北方言的慣常性行為標記“ni”，第三届西北方言与民俗国际学术研讨会，2008.6.14，中国兰州城市学院
⑦ラマール・クリスティン：“往回”式副詞的詞彙化及其動因，the 4th Kent Ridge International Round-table Conference on Chinese Linguistics，2008.9.27，シンガポール国立大学
⑧ラマール・クリスティン（柯理思）：论汉语方言中趋向补语带处所宾语的功能，第三届晋方言国际研讨会，2007.8.12，中国山西大学方言研究中心
⑨ラマール・クリスティン（柯理思）：试探北方官话方言的指示位移动词与“上/到+处所词+来/去”格式，第四届官话方言国际研讨会，2007.10.13-15，中国 陝西省安康 安康学院

〔図書〕（計 3 件）
①太田　斎：北方方言里所见的类音牵引等语音现象――以山西方言的“砚瓦”等为例――，第三届晋方言国际学术研讨会论文集，喬全生主編，2008.10，希望出版社（中国），pp.18-26
②ラマール・クリスティン（柯理思）：語

法化与語法研究（四）（呉福祥ほか主編），総頁数 512p.，論文名　「論北方方言中位移終点標記的語法化和句位義的作用」，2009.8，商務印書館（中国），pp. 145-187
③ラマール・クリスティン：The Linguistic Categorization of Deictic Direction in Chinese: With Reference to Japanese, *Space in Languages of China: Cross-linguistic, synchronic and diachronic perspectives*.(Xu, Dan (ed.) Dordrecht: Springer), 2008, pp. 69-97

６．研究組織
(1)研究代表者
太田　斎（OTA　ITSUKU）
神戸市外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：40160494

(2)研究分担者
ラマール・クリスティン
（LAMARRE CHRISTINE）
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：30240394
（2009 年度 8 月末まで。2009 年 9 月に東大から、フランス国立東洋言語文化学院に転出したため、研究分担者の資格を失い、最終年度の最後の半年は研究協力者となった）